

○1937(昭和12)年7月7日は、盧溝橋(ろこうきょう)事件で日中戦争開始の日です。

- 北京郊外の盧溝橋は、全長266.5m。欄干には大小485頭の獅子の石刻が施され、マルコ・ポーロが『東方見聞録』で、世界で最も美しい橋と讃えた。
- 盧溝橋付近で今から76年前、演習中の日本軍兵士1名が行方不明になったことから日本軍が攻撃し、本格的な戦争に拡大する。日本軍の謀略でした。
- 今、日中関係が悪化し、戦争の史跡を訪ねる日本人が少なくなっています。

盧溝橋の獅子

私の戦争体験 3.11東日本大震災・原発事故の体験 29

ヒロシマで「黒い雨」にうたれ、原発事故で再び被災

南相馬市小高区(神奈川県相模原市に避難)・遠藤昌弘さん(88歳)



私は大正14年福島市生まれで、今年88歳。父が警察官で小高町(現・南相馬市小高区)に移り、小高小学校を卒業。大阪のおじのお世話で関西工業学校に入学しました。そして、終戦前の当時最後となった兵隊検査で第二乙種合格となり、小高に帰って待機していました。

広島陸軍病院で被爆

昭和20年1月初め、20歳だった私は本隊が中国の下城子(かじょうし)の満州第2016部隊に、現役入隊しました。大阪から満州に渡りましたが、戦況悪化のためか、すぐ4月頃に日本に帰り、九州の宮崎県の佐土原というところの部隊に駐屯しました。そこで銃砲連隊に配属されますが、胃を病んでいて鼻血が出て病院を回され、4つ目の病院として広島の第二陸軍病院に転送され、そこで運命的な被爆を体験することになります。

原爆投下の16日前の7月21日、広島に転送され、市内の北西部、横川駅の近くの三滝分院(爆心地から北2.5km)に入院しました。木造平屋建てで十数棟の長い病棟が南北に並んでいました。広島は空襲もなく、比較的静かな町でした。

8月6日、原爆投下の日ですが、午前5時ごろ空襲警報が出て、やがて警戒警報に変わり、それも解除になって朝食の時間になっていました。その日、私は前の晩から頭痛がひどく、作業に出ないで病棟に残っていました。同室には、支那事変で片腕をなくしていた一等兵、それに老人兵など4人がいました。

その時 時間が止まったようでした

原爆炸裂の午前8時15分のその時刻、私はベットで眠っていました。突然、「空襲だ」という片腕の一等兵の叫び声で目を覚ましました。

その一等兵は南側のベットに寝ていて、私は最下位の二等兵でしたから、北側の廊下側に寝ていました。その一等兵が廊下へ逃げる音がしました。とっさに私も廊下に出て逃げようと扉のレールを踏みつけました。その時のレールの冷たさが今でもこの足裏に残っているように、その瞬間のことをよく覚えています。時間が止まったかのようでした。片腕の一等兵のが廊下のむこうに走って行ったのも覚えています。

爆風で廊下の壁に吹き飛ばされる

でもすぐに、「軍服、靴、戦闘帽は必ず持って逃げなければ」とひょっと考え、取りに戻ろうと部屋に入ったか入らない一瞬のことでした。霧でも吹きつけられたような爆風で、私は廊下の壁に吹き飛ばされました。それに朝でしたから南の空に光るものなんかないはずなのに、南のほうに閃光を感じたような気もしました。でも、私のベットは壁のかけになっていて、直接閃光は当たらなかったためか、私は幸い火傷はしていませんでした。同じ部屋の中で他に火傷をした人もいました。音は全く私は聞いていません。

病棟は真っ直ぐ上から押しつぶされたようなかっこうで破壊されました。私は廊下のところで頭を手で押さえて立っていると、屋根のスレート瓦が雨のように落ちてきて、たちまち足のところにたまって足が動けなくなったほどで、その時の傷は今でも両足に残っています。病棟のそばの防空壕に逃げ込みました。実に不気味なくらい静かだったように覚えています。

その後、警急集合所に集まりましたが、その時初めて自分が眼鏡を失くしていることに気づきました。集合所には兵隊の患者だけでなく、民間の人々もたくさん助けを求めて来ていました。気が動転していて、煙を見て飛行機だと叫んでいる人もいましたし、皆ひどい傷を負っていました。太陽が煙で黒い紫色だったことも鮮明に覚えています。原爆投下から20分ほど後のことと思います。(裏面に続く)

○劇団俳優座(東京・六本木TEL03-3405-4743)では、8月2日(金)～4日(日)「戦争とは2013 朗読会」を公演します。この「遠藤昌弘さんの被爆体験」を神山寛さんが、若松丈太郎さんの詩を清水良英さんが、石川逸子さんの詩を有馬理恵さんと関口晴雄さんが朗読します。

